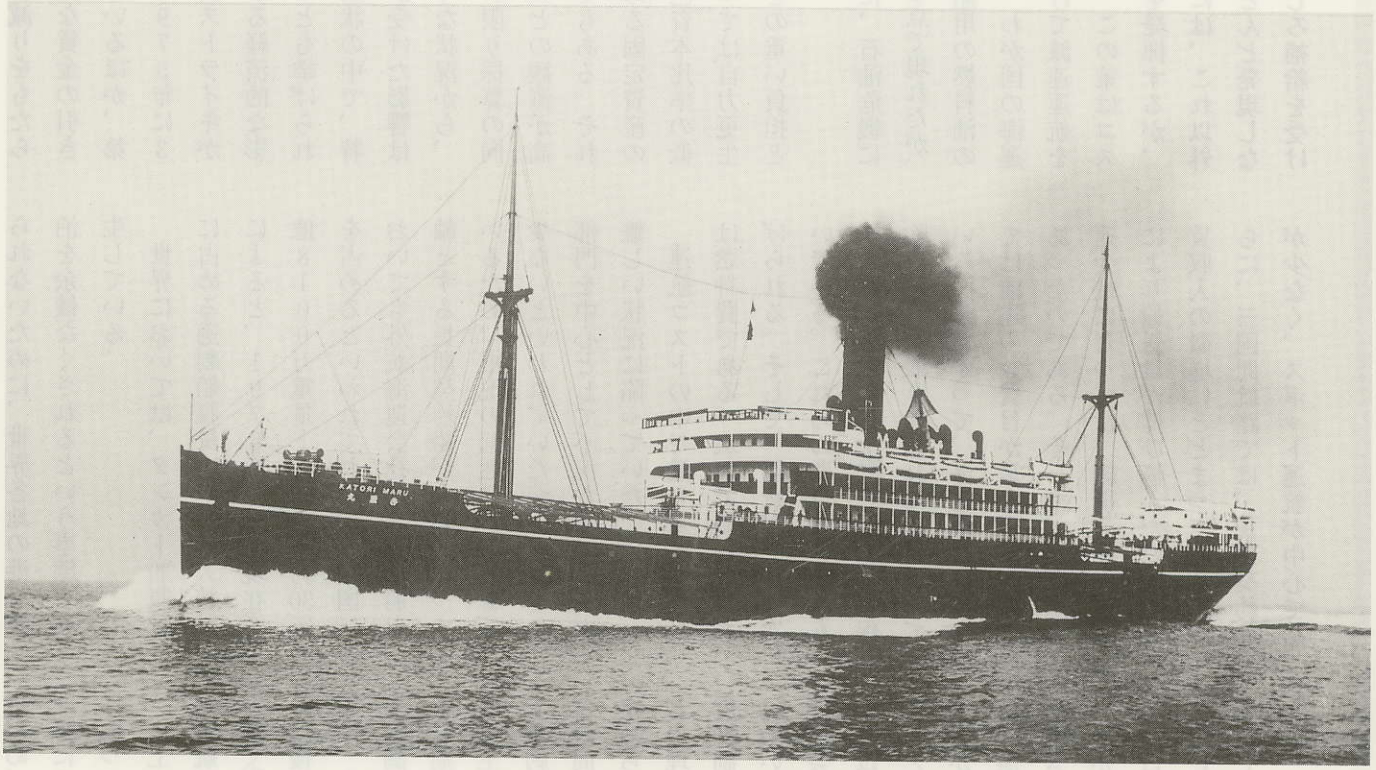
胡桃船長・今武平が海上生活の最後に指揮した船

（上）香取丸船上の今武平船長（２列目左から４人目、日本郵船歴史博物館提供）
（下）香取丸



香取丸

≪主要目≫ 貨客船、日本郵船所有、10,513総トン、垂線間長149.4メートル、幅18.6メートル、主機３連成汽機２基＆蒸気タービン１基、３軸、最高速力16.7ノット。旅客定員は１等112人、２等56人、３等186人。大正２（1913）年三菱長崎造船所で竣工。同型船は鹿島丸（神戸川崎造船所で建造）

今東光、日出海の慈父・今武平

今武平は津軽国弘前の人である。明治元年（1868）、津軽藩の御山奉行の家に生まれた。山林や鉱山を管理するという役職がら、自由で派手好みの家風だったらしい。

弘前の名門校・東奥義塾を卒業し、函館商船学校で航海術を学んだ。

明治22年（1889）日本郵船に入社。大正8年（1919）に50歳で退職するまで、勤務のほとんどを海上で過ごした。

その間、熱烈な恋愛をへて弘前の名家・伊東家の綾と結婚した。29歳のときである。

じつは今家と伊東家は犬猿の仲だった。伊東家は津軽藩のご典医の家柄である。家風は質素堅実で、今家とは正反対。明治維新のときは、今家が勤皇派、伊東家が佐幕派にわかれ、のちのちにシコリを残した。なのに、両家の若者どうしが恋仲になった。まさに「ロミオとジュリエット」の津軽版である。

綾は才女で、気性がはげしかった。武平のあとを追うように函館に渡り、キリスト教系の遺愛女学校（現・遺愛学院）に入った。

4人の男の子が生まれた。長男が東光、末弟が日出海である。ふたりは作家だから、断片的にだが、武平について語っている。この小稿の武平像も、それが出典である。

不思議な船長だった。日本にこのような人物がいたとは、奇跡としか思えない。

郵船時代の後半は船長をつとめ、「胡桃船長」とよばれた。神秘的な宇宙進化論を信じるセオソフィスト（神智学徒）であった。菜食主義者であり。胡桃を主食にしていたという。むろん、酒は飲まない。

「印度航海から戻った時、父はセオソフィストとして吾々の前に出現した」。今東光は『父今武平と霊智学』のなかで述べている。

神智学協会の本部は、インドのマドラス（現チェンナイ）近郊にあった。武平は、寄港の合間をみて、当地を訪れたのにちがいない。大詩人タゴールとも親しかった。

女性船客に好かれた武平船長

欧州航路の「香取丸」は、武平船長が海上生活の最後に指揮した船である。

明治末年に三菱長崎造船所に発注され、大正初年に完成した。船価は約299万円。郵船の欧州航路初の1万トン級客船である。同型船「鹿島丸」は川崎造船所で建造された。

主機に特長があった。往復動汽機2基と排気タービン1基を組み合わせたもので、推進軸は3軸。左右の2軸が往復動汽機、中央軸は蒸気タービンで回転した（「鹿島丸」は往復動汽機のみ装備）。「タイタニック」の主機と同じ方式である。複雑な方式だから、有能な機関部員を必要としたはずだ。

第2次大戦勃発にともない欧州航路から撤退。陸軍に徴用され、昭和16年（1941）12月、英領ボルネオのクチン沖で潜水艦の雷撃を受けて沈没、郵船の戦没船第1号となった。武平が退職して22年後のことだ。

今武平はどんな船長だったのだろうか。

とにかく、船客に人気があったらしい。とくに女性船客にたいへん好かれた。

いわゆる「追っかけ」の女性ファンもいたという。オペラ歌手の三浦環、舞台俳優の川上貞奴、奇術師の松旭斎天勝、永井荷風夫人だったころの藤蔭静枝（舞踊家）などなど。国際派のそうそうたる顔ぶれである。

白髪痩躯のジェントルマン。謹厳。ヒンズー教の行者のような武平船長が、なぜ女性船客に好かれたのか。不思議である。

「引きつけられる優しさがある。そのそばにいっときでも長くいたいという気持にさせる人だ」。ある女性船客はそう語っている。

武平は退職後、書斎にこもり、神智学の研究に没頭した。大正末年には、神智学協会の聖者クリシュナムルティが書いた戒律書『阿羅漢道』を翻訳し出版した。

昭和11年（1936）、68歳で他界した。食道ガンなのに一度も医者にみせず、薬も飲まなかった。苦痛を訴えることもなく、じっと死を待った。まさに「超人」であった。

山田　廸生